



新入生の門出を祝して

教育文化学部長・教育学研究科長 大橋 純一

秋田大学教育文化学部・教育学研究科にご入学の皆さん、誠におめでとうございます。皆さんがこれから過ごす大学生活は、学びの深化、可能性の追求、そしてかけがえのない仲間との出会いに満ちた、貴重な時間となることでしょう。ここ秋田で新たな一步を踏み出す皆さんを、教職員一同、心より歓迎します。

本学部・研究科では、「教育とは何か」「人間とは何か」という根源的な問いに向き合いながら、多様な知の体系に触れることができます。教員一人ひとりが、皆さんの学びを深め、視野を広げるサポートを惜しみません。どうか自らの興味関心を大切に、自発的に学び、考え、行動する力を養ってください。

その養うべき“力”をイメージするうえで、私からは次の3つのことをお話ししたいと思います。

第一は、「挑戦する力」です。挑戦は“戦い挑む”と書くとおり、相応の覚悟とエネルギーを要する、また労多くして結果の見えにくい、不確かな営みではあります。しかし、少なくとも皆さんの在学期間は、このキャンパスを実践の場と位置づけ、とにもかくにもチャレンジし続ける時間としてほしいと思います。ここで注意したいのは、挑戦は必ずしも成功（到達点）と同義ではないということです。むしろ、それに向けた模索や試行錯誤の過程こそが真の学びであり、挑戦の本質に他なりません。ときには失敗や挫折もあるでしょう。しかし、そうした壁に正面から向き合った経験が、次なるステップの知恵となり、可能性を広げる原動力となるはずで、挑戦には不安や戸惑いがあるかもしれませんが、その一步を踏み出すことで世界が広がります。失敗を恐れず、自ら問いを立て、大学での学びの道を切り拓いてください。

第二は、「創造する力」です。ここでの趣旨に照らせば「独創する力」と言った方がいいかもしれませんが。現代社会は急速に変化しています。特にAIをはじめとする技術革新は目覚ましく、私たちの価値観や生き方にも大きな影響を及ぼしています。AIは確かに膨大な情報を処理し、最適解を導

き出す能力に長けていると言えます。しかし、その多くは既存の知識の集積から成る最大公約数の産物であり、私たち一人ひとりの経験や感性に根ざした「創造」の営みとは異なるものです。「創造」とは、(恐らく正しいであろう)知識の受け売りとは違い、今を生きる私たちが、その今に即して個別に感じ、思考したことを踏まえて、新たな価値を生み出していく行為です。またそうした行為の源泉となるのが、他でもなく、皆さん自身が直接対象に触れ、その内に芽生えた“自分自身の問い”なのではないかと考えます。どうか、他者との違いを恐れず、むしろそこにこそ着目し、「創造(独創)」という観点から新しい世界を描き出してってください。

そして第三は、「調和する力」です。前述のとおり、私たちは皆、それぞれに異なる背景や価値観を持っています。先には、そのことをもって独自性を追求することの意義を述べましたが、それは自分だけに当てはまることではありません。当然ながら、そこでは異なる他者を理解し、各々の立場を尊重する姿勢が欠かせません。ひとつの空間で多様な他者と共にあることを学び、対話を通じて共感と連帯を育むことは、これからの社会でますます重要になってきます。「調和」とは、単に衝突を避けることではなく、異質なものの間に橋を架け、ともに新しい価値を築いていく「共創」の力です。それは、次代を担う皆さんに求められる大切な資質のひとつに違いありません。「教育」や「人間」という根源的なテーマに向き合う皆さんだからこそ、そうした力をこの学部・研究科で有意に育んでくれるものと期待しています。

以上、部局長という立場上の責務から、少々形式ばった言葉で3つのことをお話ししました。そんな心得を説くまでもなく、大学はもっと純粋に楽しく、自在で開かれた、心躍らされる場所です。秋田の豊かな自然に包まれたこのキャンパスで、皆さんが多くの出会いと対話を重ねながら、目標に向かって力強く歩まれることを願い、私の祝辞といたします。

研究倫理について ～学生・院生のみなさんへのメッセージとお願い～

学術研究推進会議長 和泉 浩

今年度の授業が始まってすぐの4月11日に、教職大学院の授業で研究倫理についての話しをしたのですが、学生と院生のみなさん、「秋田大学研究倫理規程」を知っていますか？ 読んだことはありますか？（ネットで検索すると、最新のものではないですが、見ることができます。大学として最新版をいつでも確認できるようにする必要がありますが、院生と学生のみなさんが読むことができるように、学生協議会議長の佐々木千佳先生にお願いして協議会のWebclassに掲載してもらうようにします。）

研究倫理は研究者、つまり大学の「先生」たちの「研究」にかかわることで、「自分たちには関係ない」と思っている学生も多いのではないかと思います。ですが、倫理規程の第2条で、「この規程で、研究者とは、本学の教員(退職者を含む。)及び本学で研究活動に従事する学部・大学院学生(卒業生・修了生を含む。)並びに本学で研究活動を行う受託研究員、客員研究員その他研究に関わる者(研究に関わった者を含む。)をいうものとする。」とされており、院生だけでなく、学部の学生も含まれています。

「研究倫理規程」には大切なことがいろいろと書かれているのですが、たとえば「研究者の責務」のなかに、「研究者は、専門的知識を過信することなく、自らが関与する研究が一般社会や人々に与える影響を謙虚に自覚し、常に自らの行動や発言を律するよう努めなければならない」や、「研究者は、異なる学問分野や他の国、地域、組織等の研究活動に係る固有の文化や価値観等の理解に努め、それらを尊重しなければならない」、「研究者は、相互に独立した対等の研究者として互いの学問的立場を尊重しなければならない」といったことなどが書かれています。当然のことばかりですが、いずれも忘れないようにしないといけないことです。

学生・院生のみなさんもこの規程に従って大学での研究活動に携わることが求められていますが、「人」を対象にした研究を行う場合は「倫理審査」を受ける必要もあります。修論や卒論のために行う研究はもちろんですが、授業で行う調査や実験などでも必要になることがあります。こうした手続きは調査や研究の妨げになり、面倒に感じる人

もいるかもしれませんが、倫理規程と手続きは、研究する側が自分(たち)の関心と都合でいろいろとやってしまうことに歯止めをかけ、対象になる人や子どもたちを守るためのものです。

たとえば、学外の人に話しを聞いたり、アンケートをしたり、実験に協力してもらうとき、「相手」もみなさんに同じことができるのでしょうか？「大学生」「院生」という立場だからできることも多くあるのではないのでしょうか？ それでは、なぜ「大学」がかかると「できる」のでしょうか？そこには、平等・対等とはいえない関係が隠れているかもしれません。こうしたことについても意識してもらえるといいと思います。

状況によっては、正式な手続きができないこともあるかもしれません。そうした場合でも、説明をして了承(インフォームド・コンセント)を得るようにしてください。知らない間に自分の話したこと(書いたこと)が研究や報告に使われてしまうといったことは、もし自分にされた場合、納得がいけない人も多いのではないかと思います。自分ならどうしてももらいたいかについても考えてもらえるといいと思います。もちろん、自分がいいから他人もいい、というわけでもありません。このために了承が必要になります。

内容にはかわりませんが(お天道様が見ている！と無理に関連づけられなくもないですが)、昨年も研究室から撮影した桜の写真を選んだので、今年も桜にします。今年はずっと青空のときに撮影できました。



新任の先生方からのメッセージ

<教職実践専攻>

長瀬 達也（ながせ たつや）特別教授



これからも

母校の秋田大学を2025年3月で退職しました。これまで美術の教員、学部の教員及び職員の方々に文字通り支えていただいたことに、深く感謝申し上げます。思えば、至らない点を皆さんにたくさん助けていただきました。

現在ですが特別教授ということで、4月から再び本学に勤務しています。期間は2年間です。担当科目がこれまでと変わりませんので、相も変わらず毎週の授業の準備や、授業ごとの提出物へのコメント記入などに、日々追われる毎日です。

図画工作科の指導法の基本につながる「初等図画工作科教育学」や、図工作科における表現力や鑑賞力を身に付ける「初等図画工作」の授業は、それぞれ受講学生が60人以上です。造形表現に苦手意識を感じる学生が多いことから、長年担当してきたとはいえ、毎回の授業ごとに緊張感があります。

本学に赴任以来、毎回の授業ごとに受講生の小論や造形作品にはコメントを書いて、一人一人に返却してきました。美術教育が専門ではない学生でも造形への苦手意識を克服し、図画工作科で指導力を発揮することを強く願って始めたことです。困難であっても継続したいと思います。

研究分野は美術教育における美術教育学史です。主なテーマは洋画家「山本鼎」が大正8年(1919)に提唱し、瞬く間に全国へ展開して一世を風靡した

「自由画教育」です。この「自由画教育」が日本各地、特に北東北の秋田県において、どのように理解、実践され、どんな成果と課題を残したのかについて、現職教員として秋田大学大学院に入学した平成5年(1993)から取り組んできました。

この戦前の地方図画教育史研究では、地方紙活用が有効であると考えています。そのため、大正8年(1919)から昭和15年(1940)までの地方紙『秋田魁新報』の全頁閲覧(朝刊と夕刊)を行っています。恣意的、主観的な調査にならないためにも、全頁閲覧は欠かせません。達成率はやっと85%程度ですが、ようやく終わりが見えてきました。この調査のデータ化と分析、そして考察から、全ての小学校教員、つまり美術教育を専門としない教員にも、日々の実践で役立つ研究成果を導きたいと思います。

定年に際して母校秋田大学から、幸いにも名誉教授の称号を頂きました。これに恥じぬよう教育、研究に一層励みたいと思います。これからも、何卒よろしく願いいたします。



<教職実践専攻>

長門 里香（ながと りか）特別教授



「関わってみる」経験

みなさん、こんにちは。4月より大学院教育学研究科に着任しました長門里香です。専門は、家庭科教育で、学部では「家庭科教育学演習」や「家庭経営学」等を、大学院では「教科教育実践の理論と展開」等を担当しています。県内中学校教諭、秋田県総合教育センターでの小・中・高等学校の教員研修担当、そして県内小学校管理職と、これまで秋田県の初等中等教育に携わってきました。この度、高等教育段階、それも教員志望の学生の皆さんやその指導・支援に当たる先生方と一緒にできる機会を与えていただき、学校教育に思い入れがある者としてとても嬉しく、人生の次のミッション遂行に向けて気持ちを引き締め直したところです。

私自身も、この大学の卒業生です。現在の国際資源学部の北側の棟にあった家政学研究室で、日々実験、実習やレポートに追われ、泣きそうになりながらも同期と仲良く楽しみながら取り組んでいたことが思い出されます。また、軽音楽サークルや社会人とのバンド活動に重きを置いていたことも否めず、楽器店や貸スタジオで異世代の話を聞く時間も大好きでした。飲食店等、様々アルバイトもしました。とにかく得手、不得手なく、「関わってみる」経験を積み重ねた学生時代だったように思います。失敗も数え切れないくらいありますが、子どもたちに「失敗こそ学び」「教室は間違ふところだ」と教えるに当たって、「関わってみる」経験こそが財産になったように思います。

家庭科は、それぞれの時代、家庭や地域社会を反映し内容が変化しますが、現行の学習指導要領においては、少子高齢社会の進展に対応して「家族や地域の人々とよりよく関わる力」の育成が求められ、乳児、幼児、低学年の児童、高齢者等、異なる世代の人々と関わる内容が各校種で設けられています。大学生の皆さんが様々な世代の人々と「関わってみる」経験も、卒業後、子どもだけではなく大人との関係を考えても、然りです。私も、「関わってみる」経験を通して学び続けます。これからどうぞよろしくお願いいたします。



＜教職実践専攻＞

柘植 敏朗（つげ としろう）教授



我が師の恩

4月から秋田大学にお世話になっております。この3月まで高等学校で教員を務めておりましたが、それ以前はこの秋田大学で4年間学生生活を送った身です。40年近く時間が経過して、またこの大学に通うことになろうとは考えてもみませんでしたので不思議な感じがします。大学構内や周囲の景観についても変化している点を含め大変懐かしく、当時を思い出しながらこの一月半ほどを過ごしたところです。

入学した年は日本海中部地震が起きた1983(昭和58)年で、まだ附属小学校の位置にあった大学の寮(啓明寮)に住んでおりましたが、地震当日は寮も大学にも損傷が見られ大変な災害だったという記憶が鮮明に残っています。また報道機関でアルバイトをしていたため、その日は仕事が徹夜で続き、刻一刻と新たな被害に関する情報がもたらされる緊張感が朝まで続いたことも強く印象にあります。日頃の防災意識や防災教育はとても大切なことだと初めて考えるきっかけになった出来事でした。

その頃のことで一つ紹介しますと、学生時代に文章の書き方や調査の進め方など、当時の恩師お二人に教えていただいたことがその後の様々な場面で力となってくれました。また授業以外でも学生皆でご自宅にお邪魔してご馳走になったりもし

ました。読みなさいと勧められた本や教科書を現在の研究室に何冊か持ち込んで本棚に並べてみましたが、思い返すとこれまでも時々取り出しては読み返したことで文章を修正したり話題のネタを見つけたりしたことが度々でした。そのことを考えると今でも恩師から指導していただいているのだという感覚を覚える次第です。当時は教員になろうとは思わず別の大学に進んだのですが、それでも同じように先生方に恵まれたことで今の自分があると思っています。私はまだそうした存在にはなれませんが、学生・院生の皆さんにはこのような関係をぜひ築いていただきたいと思います。

これからどうぞよろしくお願いたします。



<教職高度化センター>

田口 武美（たぐち たけみ） 客員教授



4月から秋田大学教育文化学部附属教職高度化センターにお世話になっている田口武美です。実に38年ぶりに母校の秋田大学に戻り、学生の皆さんと一緒に学び活動することができ、うれしい気持ちでいっぱいです。

時の流れは早く、大学の景色や雰囲気は変わったところもあるかもしれませんが、私にとってこの場所は変わらず学びと成長の場であり続けています。

大学時代を振り返ってみると、学びの楽しさや苦しさとともに、数多くの挑戦や発見がありました。特に忘れがたいのは、ゼミ活動を通じて得た経験です。ある研究課題に取り組んでいた際、当初は答えが見つからず試行錯誤の連続でした。しかし、多くの現地調査を行い、その調査結果を基に仲間との議論を重ねる中で視点が広がり、新たな考え方に気付くことができました。この経験が、私にとって「学びとは探求を続けること」という考えを育てたと思います。

担当する教職自主ゼミは、学問的探求だけでなく、仲間との対話を通じて教育現場の課題について考え、教育への理解を深める貴重な機会です。また、トピックの内容を仲間と共に真剣に考え、対話や協働を通じて、理論と実践のバランスを取る力を養うことも目指します。教職自主ゼミの運営に携わることとなり、教員志望の学生の皆さんが自らの学びを深め、実践力を高める場を提供することに力を注ぎたいと考えております。

教職自主ゼミは、学生の皆さんが主体的に学び、互いに切磋琢磨できる場として、学生の皆さんの

役に立つ教職自主ゼミになるよう、私も頑張っていきたいと思います。

教職を志す学生の皆さんとともに学び、成長できることを楽しみにしております。

どうぞ、よろしく申し上げます。



【地域連携フォーラム】令和6年度パイロットリサーチプロジェクト成果報告会

秋田大学教育文化学部では、2010年度より、秋田県内の地方公共団体・教育委員会・民間企業・NPO法人等との連携・協力による地域教育への貢献及び研究成果の地域社会への還元を目的として、調査・実験テーマを公募して取り組む、「パイロットリサーチプロジェクト」を実施しています。2024年度は教育文化学部の学生及び教員が3件のパイロットリサーチプロジェクトに取り組み、2025年3月14日に年度の成果報告会が以下の内容にて開催されました。

【パイロットリサーチプロジェクト研究成果報告】

社会減から見た秋田県の人口減少対策の展望—能代市の中高生のアンケート調査より—

後藤実央（地域文化学科 地域社会コース 24年度卒業）
（担当教員 熊丸博隆）

秋田県の人口は1982年の約130万人をピークに減少の一途をたどっており、現在は約88万人であり、人口減少抑制に向けた対策が急務です。人口減少は、出生児数が死亡者数を下回る自然減および、転入者数が転出者数を下回る社会減の2つに分類されます。主な自然減の要因は出生数の低下や高齢化に伴う死亡者数の増加であり、社会減の要因は進学や就職に伴う都市圏への転出超過です。

私の卒業研究では社会減に注目し、能代市移住定住推進課の協力のもと、秋田県内の定住促進策の立案を目的として、能代市の中高生を対象に社会減抑制に関するアンケート調査を実施しました。社会減を抑制することは、他県への人口流出を防ぐだけでなく、将来的には自然減の抑制にもつながる可能性があるため、社会減の抑制対策は能代市や秋田県における人口減少問題のより効果的な解決が期待されます。

調査の結果、正規雇用であることは満足度にプラスの影響を与え、労働時間や通勤時間の増加は満足度にマイナスの影響を与えることが明らかになりました。また、生活基盤の充実、娯楽施設の有無、最寄り駅の有無も満足度にプラスの影響を及ぼしており、特に最寄り駅が近いことが最も重要であることが示されました。さらに、中高生を属性ごとに4つのグループに分類して分析を行った結果、以下のような傾向が見られました。

1. 県外志望者が多いグループ：娯楽施設や最寄り駅の重要性を重視。
2. 女性が多いグループ：スーパーなどの生活基盤を重視する一方で、初任給はあまり重視されない。

3. 高校生や女性の比率が高いグループ：非正規雇用からの正規登用制度、生活基盤、娯楽施設、最寄り駅の有無を重視。

4. 基準となるグループ：娯楽施設や最寄り駅の有無が重視される傾向。

分析結果より、能代市で生活するうえでは生活基盤、娯楽施設の充実、最寄り駅の有無がすべての分析モデルで重要であることが結論付けられました。特に最寄り駅の重要性が高く、駅やその周辺地域の開発が必要であることを示唆しており、社会減抑制に向けた新たな街づくりの策定が期待されます。



大学生による酒造りを通じた地域マーケティング活動

進藤 彩 谷川 未采（地域文化学科 地域社会コース 4年）
（担当教員 益満 環）

地域文化学科益満ゼミナールでは主に地域マーケティングについて研究しています。地域マーケティングとは、自治体や地域が主体となって、その地域にヒト、モノ、カネを呼び込むマーケティング戦略を立案し、実行することです。その研究活動の一環として、2021年から大仙市と大仙市内の5つの酒蔵様のご協力のもと、「醸して大仙プロジェクト」としてオリジナルの日本酒「宵の星々」を開発し、その販売、PR活動を行っています。

私たちの活動は春の酒米作りから始まります。種まきや田植え、そして秋に稲刈りを行い、その収穫した酒米を使い冬からは本格的に日本酒作りが始まります。麴作りやもろみ作り、さらに搾りや瓶詰めまで、多くの工程を体験させていただきました。酒蔵それぞれがもつ伝統や、それぞれの工程に携わる杜氏や蔵人の方々の日本酒造りにかける情熱や想いを学びました。

私たちのゼミは「魅力ある商品やサービスを作り、伝えて、地域を元気にする」をモットーとしています。日本酒を作って終わりではなく、その魅力を広く伝えて、地域の活性化につなげることを目的としています。私たちが特に注力しているのが、あらゆる媒体を用いた情報発信です。SNSでの投稿をはじめ、テレビやラジオ、新聞にも掲載

していただき、「宵の星々」と私たちの活動を多くの皆様に情報発信しています。マーケティングの観点から、消費者と接触機会を増やすことで購入率が上がるという法則を意識して発信を繰り返しました。また、どの媒体を活用して発信を行うのが効果的であるか実験、販売を繰り返すことにより、ターゲットに適した発信方法を見出すことができました。さらに前年度は日本酒造りだけでなく、酒粕を使ったおつまみを作りました。酒粕は酒蔵によって数十トンも廃棄されており、この酒粕を有効活用すべく、酒粕を使った飴、いぶりがっこ、鮭ジャーキーを開発しました。このように、廃棄されてしまうはずの酒粕を使うことでSDGsにつなげ、地域課題の解決にも取り組みました。

私達が造った日本酒「宵の星々」は大手通販サイトの純米吟醸酒部門で売上げ第1位を獲得した他、大仙市のふるさと納税返礼品にも採用されています。今後も、私達が携わった商品が秋田の活性化の一助となるようゼミ活動に一生懸命取り組んで参りたいと思います。



日本酒仕込み



完成報告会

【パイロットリサーチプロジェクト研究成果報告】

秋田県能代市の調査・研究を通じて

伊藤ひなた 越渡愛結（地域文化学科 地域社会コース 4年）
（担当教員 和泉 浩）

私たちは、秋田県能代市企画部市民活力推進課からの「20歳前後の若い世代の声が聴きたい！」「若い女性の観光客が増加しているので、チョコレートのお土産を作りたい！」との依頼で、能代市のバスケのまちづくりとお土産に関する調査・研究に取り組みました。

昨年の5月から調査を開始し、バスケの街づくりに関する会議の議事録を読んだり、実際に能代市へ足を運び、観光スポットや能代バスケミュージアムを訪れ、職員の方からお話を伺ったりしました。また、秋田大学の学生150名にアンケートを実施し、能代市への訪問経験や訪問意欲、観光に関する質問、そしてチョコレートのお土産に関する質問に回答してもらいました。アンケート結果はコンジョイント分析などを使ってデータ分析を細かく行い、傾向等を調べました。

調査・研究の途中段階でしたが、9月に内閣府主催の「地方創生☆政策アイデアコンテスト 2024」に応募し、1次審査を通過することができました。また、調査・研究結果をまとめ、3月に能代市に提出しました。

今回の研究および発表を通して、データ分析と伝え方の工夫の重要性を実感しました。スライド作成では、データ分析の結果を分かりやすい図や言葉で表現するために、何度も修正を重ねました。研究内のチョコレートに関する調査結果では、特に男性はダークチョコレートやクランチチョコレートを好む一方で、女性はミルクチョコレートや生チョコレートを好む傾向があったことに驚きました。

こうした結果から、ターゲットに合わせた商品展開の可能性も感じました。また、他の学生の発表を聞く中で、異なる地域やテーマにおける活動内容について知ることができ、良い学びの機会となりました。今回の経験を今後のデータ分析を用いた検討や、プレゼン発表の場に活かしていきたいと思います。



能代バスケミュージアムを訪問

令和7年度（2025年度）日本学術振興会科学研究費の新規採択状況

本年度は12件が採択されました。

期間	研究種目	氏名	職名	研究科題名	直接経費合計 (千円)
R7-R11	基盤研究 (A)	Horton, William Bradley	教授	インドネシアのマラリア戦争—日本占領地 域社会における陸海軍の衛生と医療	35,400
R7-R9	基盤研究 (C)	小倉 拓也	准教授	「現前」概念に定位したアンリ・マルディ ネの哲学とその現代的意義の研究	1,300
R7-R9	基盤研究 (C)	田口 瑞穂	准教授	プログラミング的思考の萌芽を促し、育成 する児童向け教育パッケージの開発と評価	1,900
R7-R9	基盤研究 (C)	綾部 直子	講師	児童生徒の睡眠問題に対する行動的睡眠介 入による包括的支援の検討	3,500
R7-R9	基盤研究 (C)	林 良雄	教授	方言データベースによる方言学習の授業モ デルの構築	2,400
R7-R9	基盤研究 (C)	加納 隆徳	講師	高等学校公民科における「論争問題」の選 択理由と授業観の関係性に関する研究	3,000
R7-R9	基盤研究 (C)	外池 智	教授	戦後80年における「次世代の平和教育」 の現状と課題を踏まえた教育実践の構築	3,600
R7-R10	基盤研究 (C)	細川 和仁	准教授	教師の「行為の中の省察」に着目した授業 カンファレンスシステムの開発	3,500
R7-R9	基盤研究 (C)	成田 雅樹	教授	小学校国語科「物語文法を接点としてメタ 認知を深める読解・創作関連指導」の研究	1,700
R7-R10	若手研究	能田 昂	講師	子ども被災・救済の特別ニーズ教育の創造 —子どもの「コロナ禍後遺症」問題を事例 に—	2,500
R7-R9	若手研究	成田龍一郎	講師	マースデンのエゴイズム論—社会思想とし てのエゴイズム論の可能性	3,000
R7-R9	若手研究	坂本 英駿	助教	「狩野派再考—新たな狩野派の系譜論と現 代日本画制作との往還—」に向けた基礎研 究	3,300



秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第 47 号

2025 年 3 月、『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第 47 号が発行されました。ぜひご覧下さい。[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

■原著論文

地域における継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築 (3)

—京都府舞鶴市を事例として—

.....外池 智

小学校国語科「書くこと」の資質・能力を育てる教科等横断的な学習に関する研究 (3)

.....成田 雅樹

秋田県仙北市の無形民俗文化財「生保内田植え踊り」に関する研究

—お囃子楽器 (笛, 太鼓, 鉦, 鼓) と音楽について—

.....吉澤 恭子

義務教育学校開校後における教員の意識と、その変容に関する考察

.....田仲 誠祐・鎌田 信・

佐藤 文知・柘植 敏朗

障害のある児童生徒が生涯にわたって学び続ける資質・能力の育成に向けた取組

—知的障害特別支援学校保護者に対するアンケート

ト調査の分析を通じた生涯学習力を見取る視点の検証から—

.....池田 和馬・藤井 慶博
知的障害特別支援学校保護者の生涯学習に対する認識と課題

.....渋谷 純一・前原 和明
事後指導における学生の保育観—なぜ事後指導にエピソード記述を課すのか—

.....瀬尾 知子・保坂 和貴・山名 裕子
学校の教師がとらえた社会教育—秋田県教員籍社会教育主事への聞き取りから—

.....山口 香苗
方言検索システムを使った方言教育の提案

.....林 良雄・千葉 圭子・竹田 晃子

■萌芽研究論文

タマネギの細胞面積を画像解析により測定して統計処理する高等学校の授業プランについて

.....石井 照久・比嘉 和香奈

■資料

大学における学びを教師の仕事に生かすことに対する教職志望学生の意識

.....細川 和仁・田仲 誠祐



秋田大学教育文化学部研究紀要第 80 集

2025 年 3 月、『秋田大学教育文化学部研究紀要』第 80 集が発行されました。ぜひご覧下さい。

【人文科学・社会科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

若い世代の国内観光とお土産のニーズ—秋田県能代市の「バスケットのまちづくり」とスポーツ遺産ツーリズム—

・・・・和泉 浩、伊藤 ひなた、越渡 愛結
ポストコロナにおける地域観光振興の財政的課題に関する研究

・・・・臼木 智昭
東北南奥方言の音声・アクセント事象に関する調査報告—宮城県仙台市の高年話者を対象に—

・・・・大橋 純一
ASD 児における自己/他者理解の程度が問題解決方略に与える影響に関する検討

・・・・鈴木 徹
幼児期の子どもと保護者の咀嚼力と食嗜好の関連

・・・・瀬尾 知子
戦前の観光資料を用いた 1930 年代のインバウンド観光に関する分析

・・・・高橋 環太郎
ウクライナ戦争とソ連アニメーションの戦争の記憶

・・・・長谷川 章
大学進学直後の環境に対する予測可能性尺度の作成と妥当性の検討

・・・・侯 玥江・原田 勇希
秋田豪雨における地元自治体の災害対応に関するインタビュー調査

・・・・益満 環、佐々木 万亀夫
国家の宗教的・世界観的中立性の射程—バイエルン十字架命令事件の分析を中心として

・・・・棟久 敬

【教育科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

ペンジュラム・パターンの生成規則の数理モデルに基づく造形展開 (3)

・・・・石井 宏一
戦争体験「語り」の継承とアーカイブ (12) — 広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「家族証言者」を事例として —

・・・・外池 智
協働は洞察による問題解決を促進するのか？ — パズルゲーム・タングラムを用いた検討 —

・・・・中野 良樹

ICT 活用による障害者の生涯学習推進の可能性

・・・・藤井 慶博・瀬田川 榮一・後藤 進・田中勉・西嶋 崇広・安田 周悦・桜田 星宏

日本における移行アセスメントツールの導入に向けての検討：課題と可能性

・・・・前原 和明・ライアン ケルムス
知的障害特別支援学校教員の「探究的な学び」に対する認識と課題

・・・・田中 智佳・前原 和明
GPAI (ゲームパフォーマンス評価法) を用いた中学校ゴール型バスケットボール単元における試合のパフォーマンス分析 — 「意思決定」や「ボールを持たない動き」を含めた球技のパフォーマンス分析

・・・・安部 大成、秋元 卓也、松本 奈緒
小学校のゴール型ボール運動 (ハンドボール) における作戦の対話分析— タスクゲームを生かした授業づくりを通して—

・・・・長澤 未姫、松本 奈緒、伊藤 景子
フランスのコレージュにおける音楽科教育の基本方針—授業計画と芸術史教育の関わり—

・・・・吉澤 恭子
小規模高校における地域と連携した学校経営について—秋田県小規模公立高校の取組事例—

・・・・柘植 敏朗、和田 渉、鎌田 信
コロナ禍を経た児童の人間関係づくりに係る一考察—異年齢交流活動を生かした家庭科教育の視点より

・・・・長門 里香、瀬尾 知子、和田 渉

【自然科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

秋田県で利用される海藻類の成分・機能と嗜好性

・・・・小野 叶佳、池本 敦

秋田大学手形キャンパス内の陸産貝類相

・・・・石井 照久・木村 (武田) 里久

新型コロナウイルス感染症流行後における大学教室の換気と空気・温熱環境の実態調査

・・・・高野 美桜、西川 竜二

2025年度主な役職者等の紹介

◎執行部

学部長・研究科長	大橋純一	地域文化コアカリキュラム委員長	北島正人
副学部長（教育・教員養成・財務・施設担当）	宇野 力	国際交流委員長	辻野稔哉
副学部長（研究・地域連携・評価・広報等担当）	和泉 浩	留学生委員長	中尾信一
教職高度化センター長	佐藤修司	広報委員長	和泉 浩
附属学校経営委員長	前原和明	点検・評価委員長	和泉 浩
学部長補佐（教員養成・附属学校園担当）	細川和仁	学生協議会議長	佐々木千佳
学部長補佐（高校等連携担当）	和田 涉	学生支援基金運営委員長	佐々木千佳
学部長補佐（広報・地域連携担当）	益満 環	財務委員長	宇野 力
学部長補佐（広報・国際交流担当）	辻野稔哉	安全管理委員長	宇野 力
学部長補佐（学生・キャリア担当）	佐々木千佳	情報システム管理委員長	佐々木重雄
学部長補佐（FD 担当）	中澤俊輔	情報化推進会議長	林 正彦
学部長補佐（ICT 担当）	林 正彦	人事委員長	大橋純一
事務長	飯塚博幸	人権倫理委員長	大橋純一
		教員評価委員長	大橋純一

◎課程・学科・専攻・コース等

学校教育課程主任	吉澤恭子	◎附属関係	
初等中等教育コース主任	石井照久	附属幼稚園長	山名裕子
特別支援教育コース主任	能田 昂	附属小学校長	佐々木雅子
こども発達コース主任	保坂和貴	附属中学校長	外池 智
地域文化学科主任	池本 敦	附属特別支援学校長	前原和明
地域社会コース主任	成田憲二	附属学校学びのコミュニティ・スクール協議会議長	大橋純一
心理実践コース主任	中野良樹	附属学校運営会議長	大橋純一
国際文化コース主任	清水翔太郎	附属学校経営委員長	前原和明
教職実践専攻長	佐藤修司	附属学校学部共同委員長	山名裕子
学校マネジメントコース長	和田 涉	附属学校勤務改善委員長	外池 智
カリキュラム・授業開発コース長	成田雅樹	附属学校研究・研修委員長	山名裕子
発達教育・特別支援教育コース長	藤井慶博	附属学校情報化推進委員長	佐々木雅子
心理教育実践専攻長・コース長	北島正人	附属学校 ICT 教育実施委員長	佐々木雅子
		附属学校インクルーシブ教育推進連絡会議長	前原和明

◎各種委員会等

学部運営会議長	大橋純一	◎大学本部（本学部関係）	
教育企画会議長	宇野 力	理事（学生担当）・副学長	上田晴彦
学術研究推進会議長	和泉 浩	学生支援総合センター長	上田晴彦
入学試験委員長	長谷川章	高大接続センター長	上田晴彦
教務学生委員長	林 武司	ハラスメント相談員	成田雅樹
学務委員長	細川和仁		内田昌功
キャリア委員長	林 良雄	学生相談所専門相談員	小野寺倫子
教員養成委員長	宇野 力	学生相談所相談員	佐々木千佳
教職入門実施委員長	瀬尾知子		柴田 健
教育実地研究実施委員長	吉澤恭子		石井照久
教育実習実施委員長	林 正彦		佐々木千佳
介護等体験実施委員長	能田 昂		中尾信一
教職実践科目実施委員長	若有保彦		瀬尾知子
保育士養成実施委員長	瀬尾知子	学生特別支援室会議委員	木村久仁子

2025年度事務部・技術部等（本学部・研究科関係）の体制

【6月23日現在】

事務長	飯塚博幸		
総務担当		会計担当	
総括主査	大坂直毅	総括主査	菊地 恵
主査	齋藤祐香	事務職員	佐々木星哉
事務職員	麻生創太	再雇用事務系スタッフ	長尾徳子
//	大木美駒		
事務系スタッフ	佐藤奈津子		
//	佐藤嘉実		
//	菅原里奈	附属学校園	
//	高山美千世	事務室長	戸島隆造
再雇用事務系スタッフ	朝倉由美子		
事務系スタッフ（教職高度化センター事務室）	佐々木紹子		
//（臨床心理相談室）	成田明子	入試課（教育文化担当）	
学務担当		総括主査	麻生厚司
主査	佐藤 昂	事務系スタッフ	伊藤理絵
事務職員	石橋智香		
//	及川大輔	技術部	
//	村田里帆		
事務系スタッフ	高橋史佳	総括技術長	毛利春治
		技 術 長	小林 到
		//	山下清次
学生支援・就職課		技術専門員	若杉 圭
事務職員	小山田隼人	技術専門職員	綿谷健佑
事務系スタッフ（就職情報室）	伊藤睦子	シニア技術専門職	成田堅悦
//	目黒真帆		

学部・研究科の活動（2025年3月～6月）

【全学】

3/12：後期日程
3/22：卒業式
4/5：入学式
6/1：創立記念日

【学部】

3/14：地域連携フォーラム&FD・SDフォーラム
3/22：卒業式、旭水会、卒業を祝う会
4/4：在学生ガイダンス
4/7：新入生ガイダンス
4/8：前期・第1クォーター授業開始
4/18：カウンスル開催（5/16, 6/20）
5/9, 13, 20：定期健康診断
6/10：第2クォーター授業開始
6/24：学部長との懇談会

【教育学研究科】

3/22：卒業式、旭水会、卒業を祝う会
4/4：在学生ガイダンス
4/7：新入生ガイダンス
4/8：授業開始
6/20：大学院説明会

【附属学校園】

3/7：附中卒業式
3/17：附小卒業式
3/27：離任式
4/4：新任式・始業式
4/7：附中入学式
4/8：附小、附特入学式
4/10：附幼入園式
5/24：はとの子運動会（附小）
6/6：附中春季公開研究協議会
6/4：附小オープン研修会

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910年制作）を聴くことができます。